

# 獣医師と大学との連携で行う「動物とのふれ合い授業」の意義

著者	?原 高文
雑誌名	社会保育実践研究
巻	2
ページ	11-21
発行年	2018-02-26
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1088/00001717/">http://id.nii.ac.jp/1088/00001717/</a>



## 獣医師と大学との連携で行う「動物とのふれ合い授業」の意義

柳原高文\*

(名古屋国立大学保健福祉学部社会保育学科)

キーワード：生活科、保育内容（環境）、動物飼育、動物とのふれ合い授業

### はじめに

動物園や観光牧場などで、幼児対象の「動物とのふれ合い」を目にすることが多くなってきている。平凡社大百科事典（1986）によると、人類が家畜化に成功したのは今から約1万年前であったとされ、最初に家畜化されたのはイヌでオオカミから馴化されたそうだ。その当時から人類と飼育動物とは強い信頼関係で結ばれていたのか、現代に暮らす私たちも、動物とふれ合うことで安らぎを求めていると思われる。文部科学省委託研究を行った日本初等理科研究会「学校における望ましい動物飼育のあり方」（2003）によると、「幼稚園で小動物を飼育しながら生き物の成長を喜んだり、見たり、触れたり、聴いたり、匂いを嗅いだりなどして、小動物に親しみ、世話をするなかで、自分以外の相手を思いやる心を育み、豊かな人間形成の基礎を培うことが期待できる。」「誕生-成長-繁殖-病気-死といった生命の循環を知ったり、繁殖行為を通して生命の不思議さや尊厳にも触れたりしながら、命あるものの生き方への理解を深めていく。これは、間接体験では得にくいことである。」とあるように生き物を飼育することの教育効果を期待している。「幼稚園教育要領 身近な環境とのかかわりに関する領域（環境）」では、「（5）身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり大切にしたりする。」とある。さらに、今から約半世紀前の「幼稚園教育指導書 領域編 自然」でも、そのねらいにおいて、「1 身近な動植物を愛し、自然に親しむ。」と明記されている。また、小学校1、2年生の教科「生活科」では、その指導内容に「（7）動植物の飼育・栽培」があり、小学校学習指導要領解説 生活編によると、全体構想の思考・認識等では、「それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付く。」とあり、能力・態度等では、「生き物への親しみを持ち、大切にすることができる。」と明記されているように、生き物の飼育を指導内容に組み込んでいる。

山下久美ら（2009）は、動物飼育経験の効果は「やさしさ・思いやりが育つ」、「命の尊重の気持ちを育てる」、「仲間との関係に好影響がある」、「生物への興味・探究心が育つ」、「感動体験」など多く教育効果を論じている。また、藤崎（2004）が幼児の身近な動物（ウサギ）に対する「心の理解」の発達を試みたところ、「年長児は年少児に比べてウサギの習性に合わせて接しており、コミュニケーション活動も増えていた。またウサギと頻繁に関わっていた年長児の子どもたちは、ウサギに対する生物学的知識を豊富に有する一方で、『心』の側面に関して、ヒトが持つような高次の心的機能をウサギに付与している。」と論じている。さらに、食べるために小学校でブタを飼育した黒田（2003）によると、「命の問題を考えるということは、答えが一通りでない問題を考えることである。」と教育の多様性を自らの著書で述べている。

このように、動物の飼育は命に関わる教育だけではなく、生き物への思いやりの心を育てること、幼児（児童）の心の拠り所としていることも分かる。特に、ウサギはその生命の長さが5～7年であることから、幼児（児童）が幼稚園や小学校に在籍している期間に「死に立ち会う」ことができる教育的効果が期待できる飼育動物である。これらの理由からウサギを飼育している幼稚園、小学校が多いが、動物の飼育について、遠藤ら（2002）の調査によると、埼玉県58園、東京都50園、群馬県2園、新潟県2園、栃木県1園、山形県1園の

---

\* 責任著者

柳原高文 salix@nayoro.ac.jp

114の幼稚園のうち95%の108園で何らかの動物を飼育しており、上位3位までを挙げるとウサギ、ニワトリ、カタツムリであり、かなりの幼稚園で動物を飼育していることがわかる。野田ら（2000）の調査でも愛知県内私立幼稚園50園、名古屋市立幼稚園29園にアンケート調査し（解答率76%）、ウサギを飼育している園は64%とウサギの飼育が最も多く見られた。さらに、野田ら（2001）の愛知県下小学校の調査でも、90%の学校がウサギを飼育していることがわかった。しかし、その飼育方法について、野田ら（2000）は、「指導する教師が十分な動物飼育についての体験や、知識を持っているか」という現状では十分であるとは言えない。」と論じている。そこで、大学の教育学部の授業の一コマとして「動物とのふれ合い授業」を栃木県獣医師会と連携して行い、事後アンケートをまとめた。

## 方法

栃木県獣医師会は、県内の小学校で「動物とのふれ合い授業」を行っており、飼育動物（特にウサギ）の飼い方の指導をしている。栃木県小山市に位置する、白鴎大学教育学部「生活科概説1」の2014年、2015年、2016年の講義において、栃木県獣医師会をゲストティーチャーとして招き、この「動物とのふれ合い授業」を行った。「生活科概説1」は当時筆者が担当しており、小学校教科学習や幼稚園教員養成として生活科を学ぶ講義であった。90分の半分はパワーポイントを用いた学校飼育動物の知識の講義を行い、残り半分の時間は10名程度のグループに分かれ獣医師が各1名担当し、ウサギ1羽を使って行う体験的な講義であった。この「動物とのふれ合い授業」に参加した学生の事後アンケートから分析を行った。



写真1 ウサギの生態・飼い方の説明



写真2 ウサギの心音を聴く



写真3 ウサギをだっこして心音を聴く



写真4 ウサギの雌雄の判別方法を指導する

## 結果

ウサギを使つての体験的「動物とのふれ合い授業」の事後アンケートの結果は次の通りだった。

設問1 生き物を飼った経験がありますか？また、飼った経験のある動物の種類は何ですか？

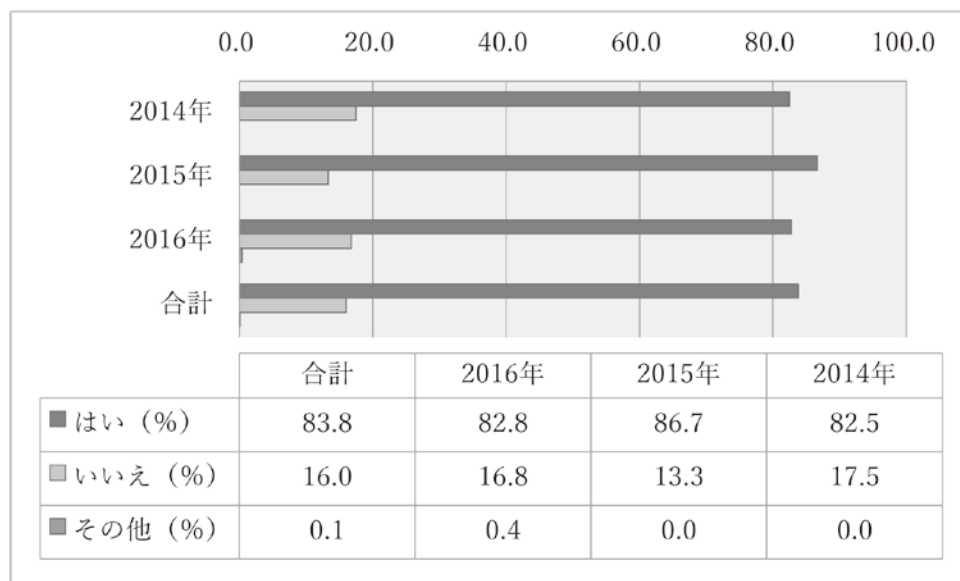


図1 生き物を飼った経験のある人数

表1 生き物を飼った経験がある割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	82.5	86.7	82.8	83.8
いいえ(%)	17.5	13.3	16.8	16.0
その他(%)	0.0	0.0	0.4	0.1

いずれの年度も85%前後の学生が「はい」と答えている。

飼ったことのある生き物の種類は次のようになった。データ整理の便宜上、「両生類」、「は虫類」、「甲殻類」、「その他」は同じグループにした。

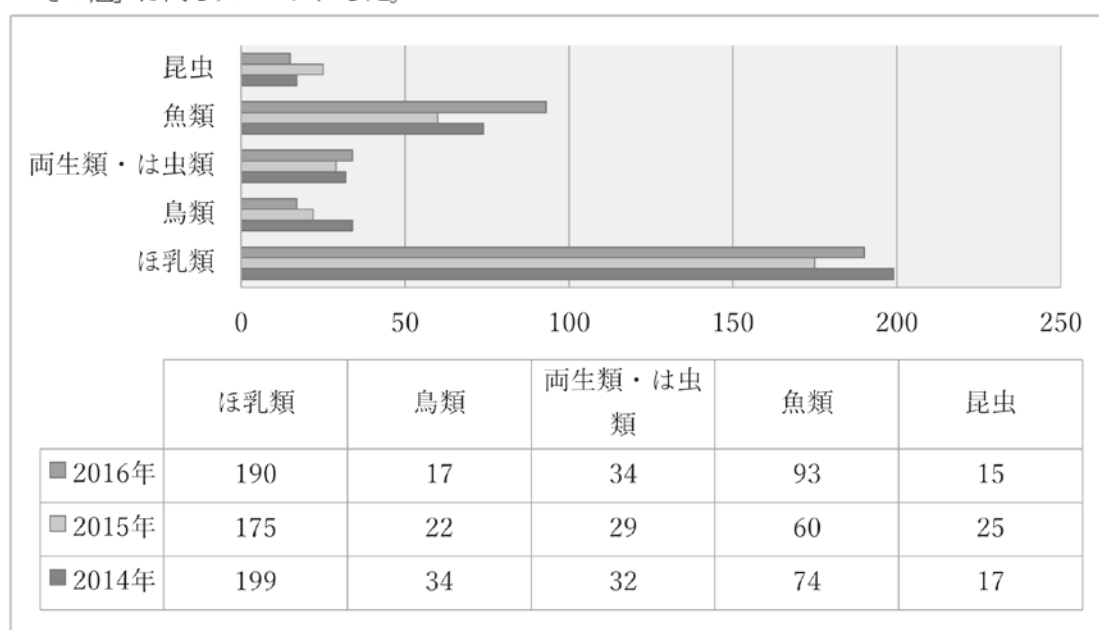


図2 飼った生き物の種類（人）



表2 飼った生き物の割合 (%)

	2014年	2015年	2016年	合計
ほ乳類(%)	55.9	56.3	54.4	55.5
鳥類(%)	9.6	7.1	4.9	7.2
両生類・は虫類(%)	9.0	9.3	9.7	9.4
魚類(%)	20.8	19.3	26.6	22.3
昆虫(%)	4.8	8.0	4.3	5.6
合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0

いずれの年度も「ほ乳類」が55%前後で最も多く、次に「魚類」であった。

「ほ乳類」の内訳では、「イヌ」が約40%、「ネコ」が約20%、以後「ハムスター」が20%弱、「ウサギ」が約10%であった。珍しい動物では、「ウシ」2014年2名、2015年2名、「ヒツジ」2015年1名などがあった。

「魚類」では「金魚」が約26%と最も多く、それ以外は特定ができなかった。

## 設問2 小学校の時に飼育係（生き物係）をしたことがありますか？

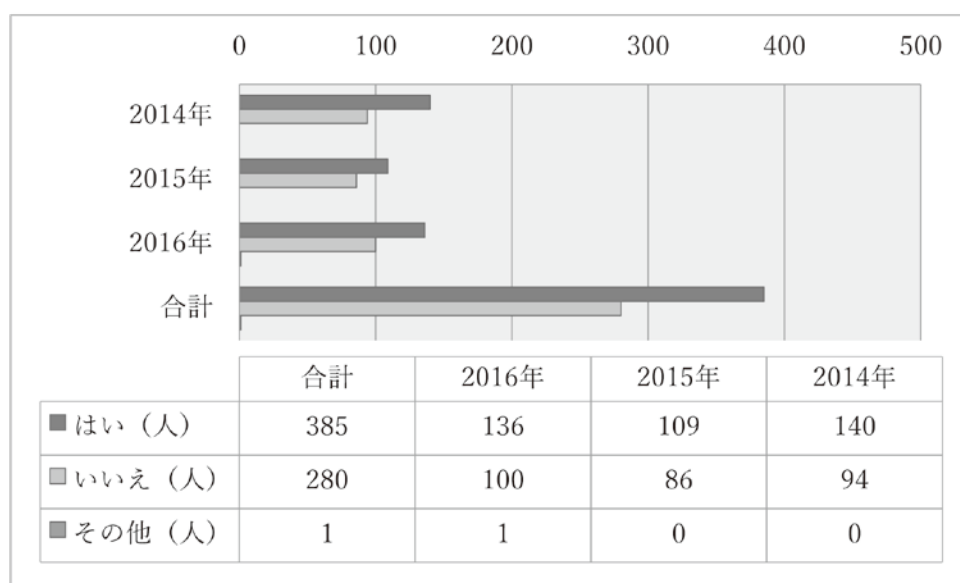


図3 飼育係をしたことがある人数

表3 飼育係をしたことがある割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	59.8	55.9	57.4	57.8
いいえ(%)	40.2	44.1	42.2	42.1
その他(%)	0.0	0.0	0.4	0.2

いずれの年度も約58%前後の学生が「はい」と答えている。

設問3 小学校の時に「動物とのふれ合い授業」を受けたことがありますか？

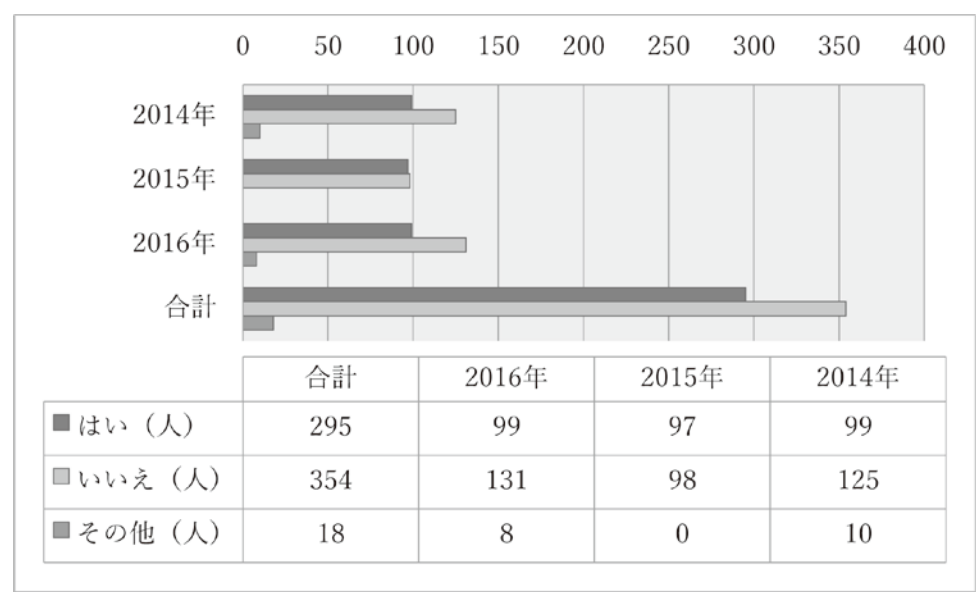


図4 動物とのふれ合い授業を受けたことがある人数

表4 動物とのふれ合い授業を受けたことがある割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	41.9	37.4	40.3	40.0
いいえ(%)	53.8	62.6	52.1	55.8
その他(%)	4.3	0.0	7.6	4.2

いずれの年度も約40%前後の学生が「はい」と答えている。

設問4 ウサギは実習でさわりましたが、ニワトリにさわることができますか？

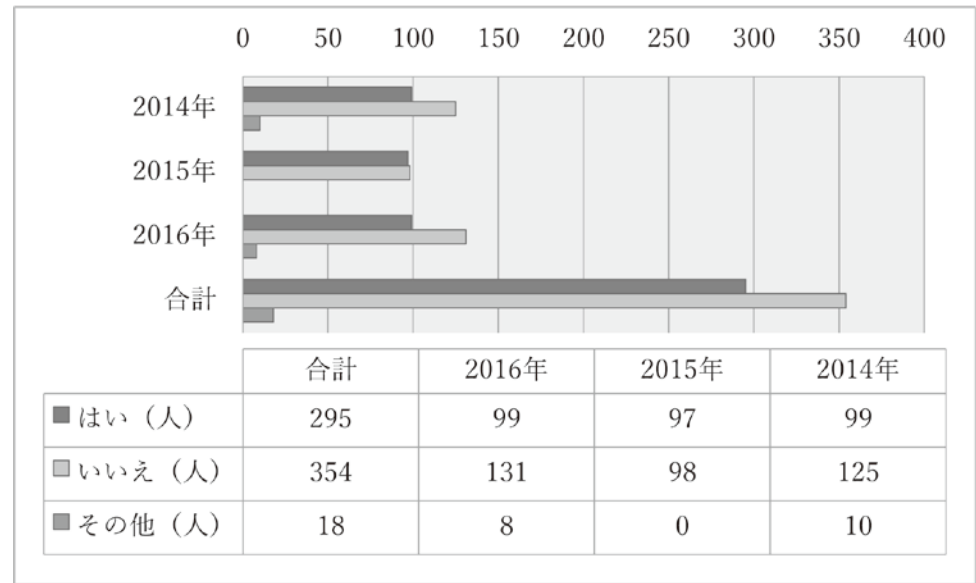


図5 ウサギは実習でさわったが、ニワトリにさわることができる人数

表5 ウサギは実習でさわったが、ニワトリにさわることができる割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	42.3	49.7	41.6	44.2
いいえ(%)	53.4	50.3	55.0	53.1
その他(%)	4.3	0.0	3.4	2.7

年度によるが、約半数を下回る学生が「はい」と答えている。

設問5 ウサギ、ニワトリ等の動物は好きですか？

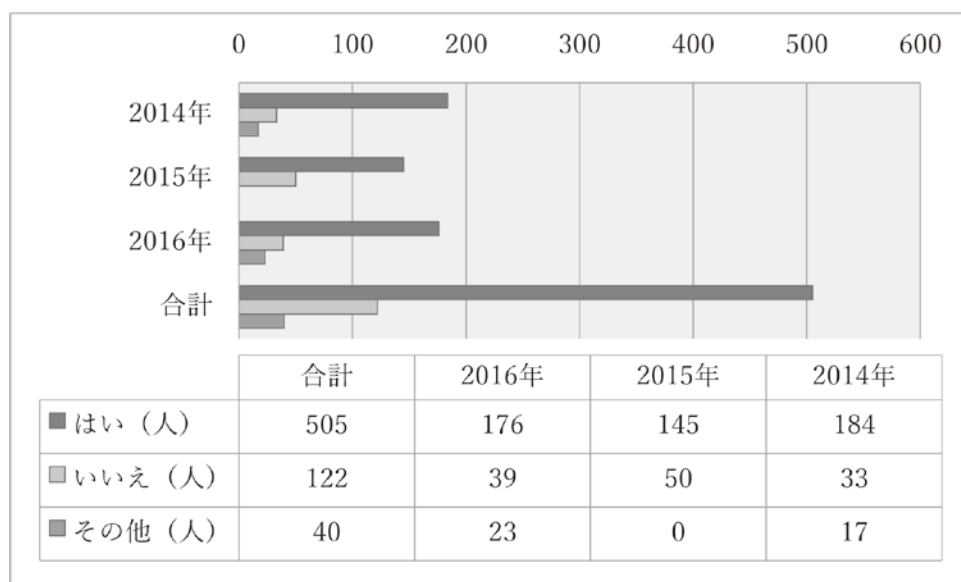


図6 ウサギ、ニワトリ等の動物が好きな人数

表6 ウサギ、ニワトリ等の動物が好きな割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	78.6	74.4	73.9	75.7
いいえ(%)	14.1	25.6	16.4	18.3
その他(%)	7.3	0.0	3.4	6.0

約76%前後の学生が「はい」と答えている。

設問6 小学校で動物を飼うべきだと思いますか？

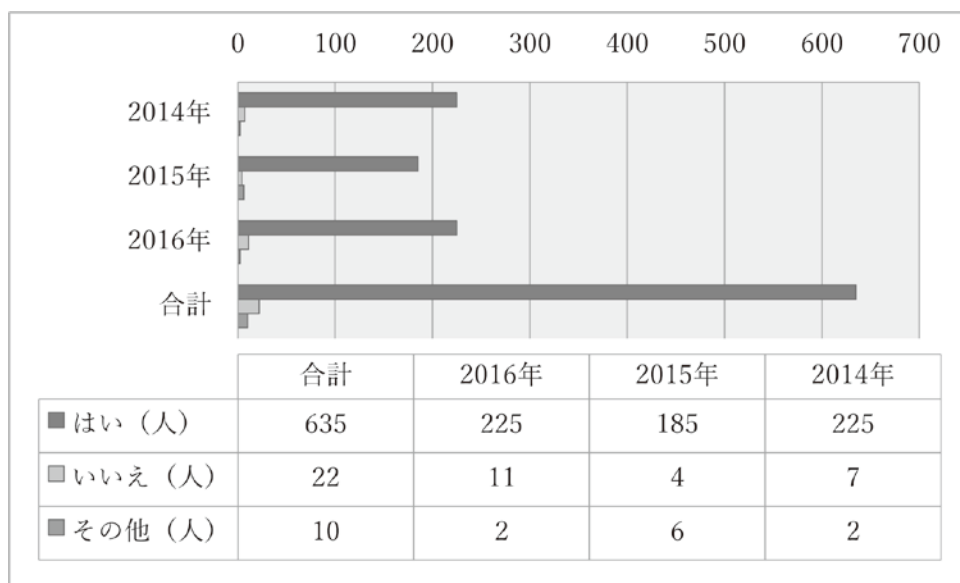


図7 小学校で動物を飼うべきだと思う人数

表7 小学校で動物を飼うべきだと思う割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	96.2	94.9	94.5	95.2
いいえ(%)	3.0	2.1	4.6	3.3
その他(%)	0.9	3.1	0.8	1.5

いずれの年度も、95%前後の学生が「はい」と答えている。

設問7 生活科で動物飼育（ウサギ・ニワトリ）が勧められていることを知っていますか？

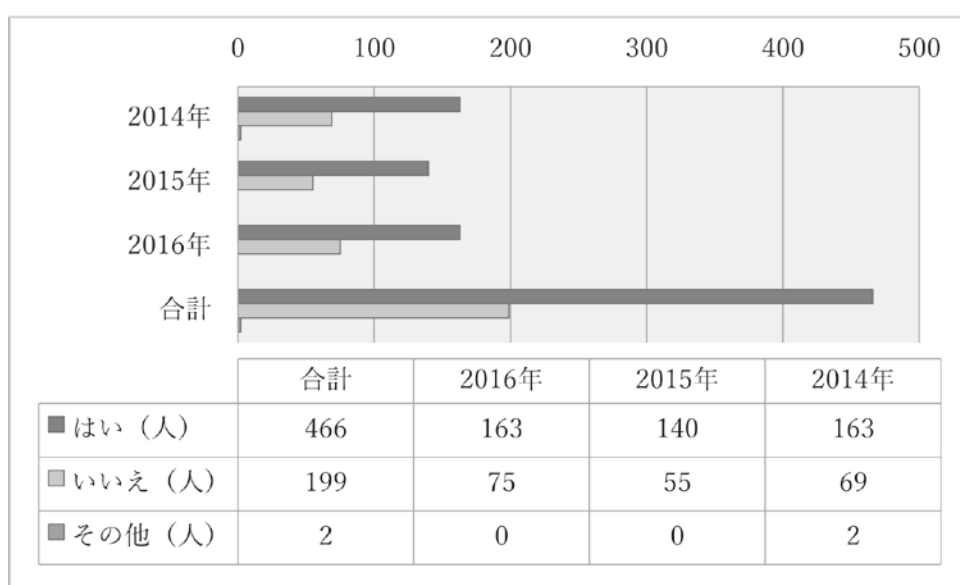


図8 生活科で動物飼育（ウサギ・ニワトリ）が勧められていることを知っている人数



表8 生活科で動物飼育（ウサギ・ニワトリ）が勧められていることを知っている割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	69.7	71.8	68.5	69.9
いいえ(%)	29.5	28.2	31.5	3.0
その他(%)	0.9	0.0	0.0	0.0

約70%前後の学生が「はい」と答えている。

設問8 教師になってすぐに飼育指導を任された場合、自信を持って臨めますか？

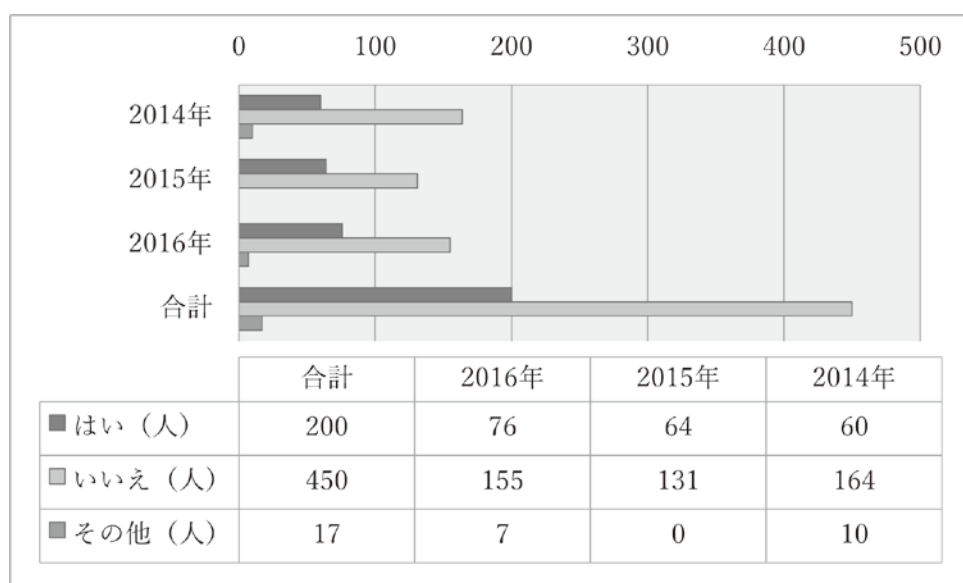


図9 教師になってすぐに飼育指導を任された場合、自信を持って臨める人数

表9 教師になってすぐに飼育指導を任された場合、自信を持って臨める割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	25.6	32.8	31.9	30.0
いいえ(%)	70.1	67.2	65.1	67.5
その他(%)	4.3	0.0	2.9	2.5

約30%前後の学生が「はい」と答えている。

設問9 今回の授業でウサギ、ニワトリの生態、飼育方法について理解できましたか？

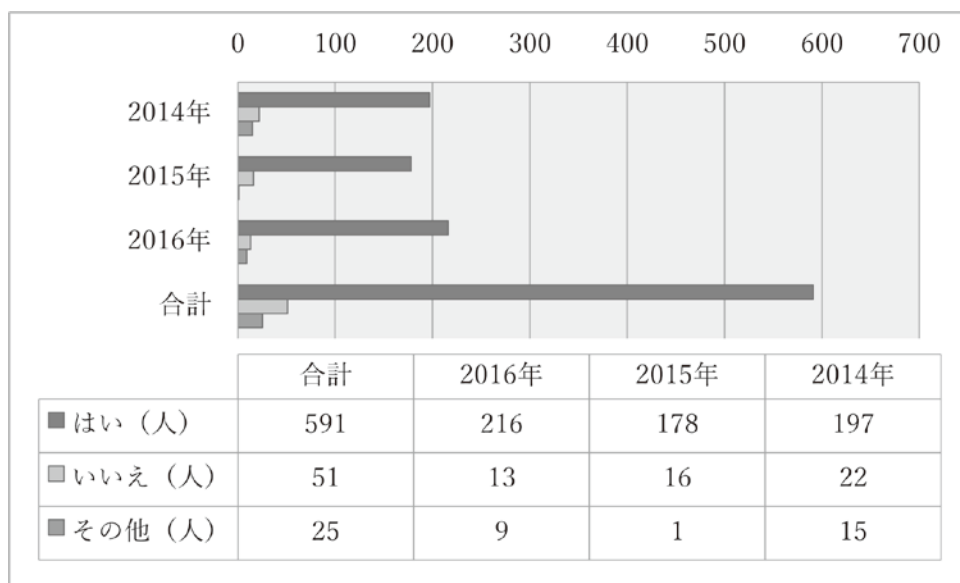


図 10 今回の授業でウサギ、ニワトリの生態、飼育方法について理解できた人数

表 10 今回の授業でウサギ、ニワトリの生態、飼育方法について理解できた割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	84.2	91.3	90.8	88.6
いいえ(%)	9.4	8.2	5.5	7.6
その他(%)	6.4	0.5	3.8	3.7

約88%前後の学生が「はい」と答えている。

設問 10 教師になってから、ウサギを使ったふれあい授業を行ってみたいですか？

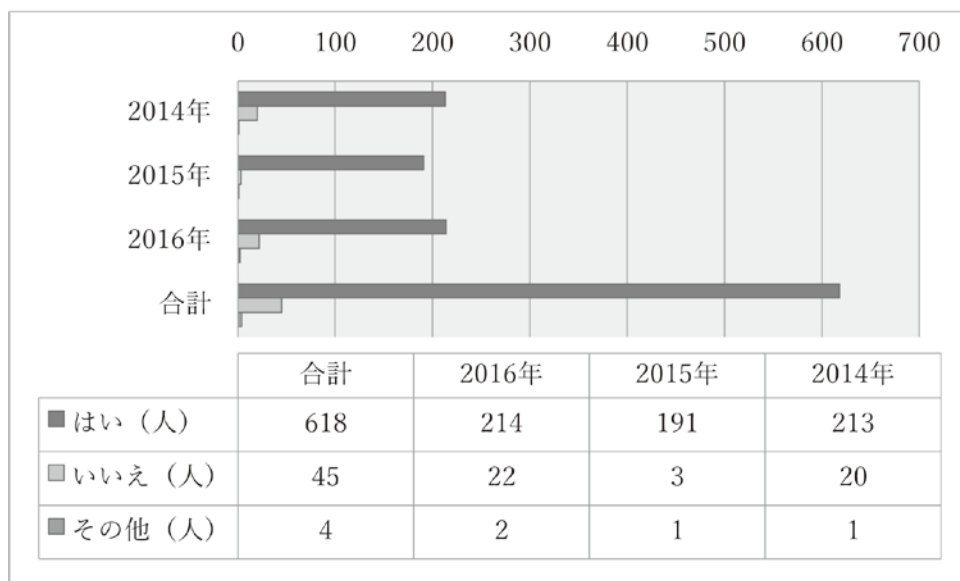


図 11 教師になってから、ウサギを使ったふれあい授業を行ってみたい人数

表 11 教師になってから、ウサギを使ったふれあい授業を行ってみたい割合

	2014年	2015年	2016年	合計
はい(%)	91.0	97.9	89.9	92.7
いいえ(%)	8.5	1.5	9.2	6.7
その他(%)	0.4	0.5	0.8	0.6

約 93%前後の学生が「はい」と答えている。

## 考察

設問 1、2 から、多くの学生が何らかの動物を飼育していたこと、飼育係（生き物係）をしていたことが分かるが、設問 3 から「動物とのふれ合い授業」を受けたことがある学生は半数に満たず、小学校においてこの授業が十分に行われていないことが分かる。さらに、設問 4 ではニワトリにさわることができる学生が半数に満たないが、設問 5 でウサギやニワトリが好きな学生が約 75%前後いることから、これらの学生が「動物とのふれ合い授業」を小学校時代に受けていればニワトリにもさわることができたのではないかと推察できる。設問 6 で約 95%前後の学生が「小学校で動物を飼うべきだ」と考えていることが分かった。これは、実際にウサギをだっこするという体験後故、高い数値になっているとも考えられるが、実際に動物とふれ合うことで、その暖かさ、安らぎを得られたことから子どもたちにもその体験をしてもらいたいという願望の現れかも知れない。設問 7 で約 70%前後の学生がウサギ・ニワトリの飼育を勧められていることを知っていることが分かるが、設問 8 から、いざ自分が飼育指導の立場になれば自信を持って飼育指導ができると答えた学生は約 30%前後であることから、現状では自信がないことが伺える。しかし、設問 9 で今回の授業でウサギやニワトリの生態、飼育方法を理解できた学生が約 88%前後いることから、その必要性を感じ、方法が理解できているのならば、自信がなくても勇気を出して行動することが教師としての使命であると考えてもらいたい。そして、設問 10 で、教師になってからウサギを使ったふれ合い授業を行ってみたいと考えている学生が約 93%前後いることから、この「動物とのふれ合い授業」を体験することで、動物を飼育することへの不安は少なくなっていると推察できる。

この活動で、教師の卵と言われている大学生 667 名中その約 95%である 635 名の学生が「小学校で動物を飼うべきだ」と考え、約 93%の学生 618 名が「ウサギを使ったふれあい授業を行ってみたい」と考えていることを教員養成の大学として真摯に受け止め、講義に組み込まなくてはならない。

経験豊富な教師を「ベテラン教師」という呼び方があるが、この経験はいかに多くの体験をこなしてきているかに繋がる。しかし、すべてのベテラン教師も最初は経験の少ない初心者である。その活動の入り口に向かう前に「動物とのふれ合い授業」の機会があり、体験を伴う知識を身につけることは、初心者にとって自信と勇気につながるものと考えられる。これらのことから、幼稚園・保育園（所）・小学校において、動物の飼育（特にウサギ）の教育的効果を得るためには、教員養成としての大学の講義において、獣医師など専門的知識を持った指導者による「動物とのふれ合い授業」の役割が大きいと考えられる。

## 謝辞

「動物とのふれ合い授業」の実施、アンケートデータを提供して下さった栃木県獣医師会の皆様に感謝致します。ありがとうございました。

#### 引用文献・参考文献

- 下中邦彦編集（1984）「大百科辞典」平凡社
- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 生活編」日本文教出版株式会社
- 文部科学省（2008）「幼稚園教育要領解説」株式会社フレーベル館
- 文部省（1970）「幼稚園教育指導書 領域編 自然」株式会社フレーベル館
- 文部省（2009）「復刊 自然の観察」社団法人農山漁村文化協会
- 黒田恭史（2003）「豚のPちゃんと32人の小学生」株式会社ミネルバヴァ書房
- 中村健太ら（2014）「生活科・総合的な学習における中型動物（ヤギ・ヒツジ）の教材性」愛知教育大学研究報告
- 大西秀彦ら（2003）「学校における望ましい動物飼育のあり方」日本初等理科教育研究会
- 野田敦敬ら（2000）「幼稚園における飼育活動と生活科への接続」愛知教育大学研究報告
- 山下久美ら（2005）「幼稚園・保育園の動物飼育状況と飼育体験効果に関する研究展望」埼玉大学大学院教育学研究科